

[ 原著論文 ]

## 漱石「個人主義」思想の自恃論的要素

— アメリカ超越主義からの影響を探る —

高継芬<sup>1</sup>、山本孝司<sup>1</sup>

### 【要旨】

本稿が取り上げる夏目漱石、アメリカ超越主義の代表格エマソン、ホイットマンは、民主主義胎動期に生きた人々である。

本稿では、アメリカ民主主義思想の要となる超越主義を出発点とした「自恃」の教えが、ホイットマンを経由し、漱石にどのように受容されていったかを描くと同時に、こうした影響関係に位置づけた上での漱石個人主義思想の意義を探ることを試みた。

エマソン、ホイットマン、漱石の個人主義思想で言及される「自己」は、西欧近代的な自我とは異なる、ある種の東洋思想的な要素が混在している点で共通していた。そしてこのような要素を含むことによって、三者にとって共通する、大衆のなかにあつて個が集団に埋没しない個人主義を基調とする民主主義を唱導することが可能であったといえる。

本稿において、エマソン、ホイットマン、漱石の思想的水脈が浮き彫りにされたことは、アメリカ文学、日本文学研究にまたがる個人主義受容の過程に光を当てるための契機となり、また、漱石の個人主義の特質を、アメリカ文学史に位置づけて論究するための礎石になるだろう。

### I. はじめに

#### 1. 問題設定

明治の文豪である夏目漱石が受容した外来思想については、イギリス留学の経験と結びつけて語られることが多い。1900（明治33）年、漱石33歳の歳にイギリス留学を命じられ、ロンドンにおいて二年余りにわたる海外生活を送っている。イギリス留学の経験が、漱石にとってあまり肯定的に受け取られなかったことは通説になっている。

本稿が取り上げる夏目漱石、アメリカ超越主義の代表格エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)、ホイットマン(Walt Whitman, 1819-1892)も、それぞれに民主主義胎動期に生きた人々である。時代区分で言えば、アメリカに関しては、アンテベラム期から南北戦争を挟んで、ポスト南北戦争期に相当する。日本に関しては、明治期に相当するが、民主主義思想を

理論的支柱に据えた国会開設運動が展開するのもこの時期である。教育においては、民権派として植木枝盛が「東洋大日本国国憲按」(1881年)<sup>1)</sup>

で、思想・言論・集会・結社の自由をあげ、「日本人民は何等の教授をなし何等の学をなすも自由とす」（「東洋大日本国国憲按」第59条）という自由教育論を説いていた。こうした動きがあった一方で、漱石が学童期を過ごした19世紀70年代から、学校現場において自由民権運動への抑圧も徐々に強まっていた。この流れはやがて個を国家へと吸収する「大日本帝国憲法・教育勅語体制」へと帰着することとなる。

明治の黎明期にあつて、漱石の立ち位置は独特である。当時の明治政府（文部省）の命により渡英し、いわば官の立場での留学であった<sup>2)</sup>。しかしながら、周知のように漱石はイギリスにおいて神経衰弱に陥り帰国の途につく。官職としての留学実績については落第点であった。さらに不思議なことには、同じアングロサクソンの国でも、イギリスから独立したアメリカの思想に漱石が共感を示した点である。この彼が共感をもって受容したアメリカの思想こそ、ホイットマンの文学に浸透していた民主主義思想に他ならない。ホイッ

<sup>1</sup>九州看護福祉大学看護福祉学部 社会福祉学科

トマンの讚美する民主主義は大衆を主権に据えたそれであり、今日の大衆消費社会を基盤とするアメリカ民主主義のプロトタイプ的な思想であったといえる。他方で、彼による「大衆」讚美は、矛盾した表現になることを恐れずいうならば、個人主義的側面をもつ。

こうしたアメリカ民主主義のもつ個人主義的性格は、ホイットマンに先立ち、エマソンによる自恃論のなかにも垣間見ることができる。エマソンは19世紀のコンコードを中心に起こった思潮である超越主義の立役者として位置づけられており、彼の自恃論は超越主義全般に通底するエッセンスでもある。

『民主主義と教育』(Democracy and Education)の著者でも知られる、プラグマティズムの哲学者デューイ(John Dewey, 1859-1952)は、エマソンを「民主主義の哲学者」と呼び、次のように述べている。「もし哲学者たちが、エマソンの辛辣にして穏健な文芸のみを褒めそやして、エマソンの形而上学をけなすなら、そのこと自体が、エマソンはおそらくわれわれ哲学者の慣習的な定義づけ以上になにか深いものを知っていたことを認める反証になる」<sup>3)</sup>。ここでデューイによって指摘される哲学者としてエマソンに備わる「なにか深いもの」とは、アメリカ市民社会の成熟過程にあって、個人の尊厳、自己信頼を基軸にした公共領域の実現を唱えた彼の倫理的要請のことを指す。

エマソンたち超越主義の最盛期から若干ずれてホイットマンは詩人としてのデビューを飾ることになる。ホイットマンは当時エマソンとももちろん交流をもっていたのであるが、その思想的影響関係については、ホイットマンの「わたしは自分自身を讚美する」という宣言にあるように、自己信頼の思想を基底とした人間観、社会観にあるといえる。こうした自分自身の存在を楽観的に肯定するホイットマンの詩作から、文豪夏目漱石は、日本に先んじて形成されつつあった市民社会の核たる民主主義的要素を見出している。

本稿では、上に素描した、アメリカ民主主義思想の要となる超越主義を出発点とした「自恃」の教えが、ホイットマンを経由し、漱石にどのように受容されていったかを描くと同時に、こうした

影響関係に位置づけた上での漱石個人主義思想の意義を探ることを試みる。この水脈を浮きあがらせることは、アメリカ文学、日本文学研究にまたがる個人主義受容の過程に光が当てられるのみならず、漱石の個人主義の特質を、アメリカ文学史に位置づけて論究するための礎石になるものと思われる。

## 2. 先行研究および考察の視点

エマソンとホイットマン、ホイットマンと漱石の影響については指摘されるものの、自己信頼の思想に焦点化してエマソンからホイットマン、さらには夏目漱石へという思想的水脈について論究するものは、管見する限り、これまでのところ存在しない。

夏目漱石における個人主義に関する研究としては、亀山の漱石思想における個人主義から超個人主義への発展過程の論考が代表としてあげられる<sup>4)</sup>。本稿が論究の素材としてとりあげる漱石とホイットマンとの関係については、漱石の読んだホイットマンの詩を通してその影響関係が考察された、鈴木、吉武による研究がある<sup>5)</sup>。

また、ホイットマンによる超越主義思想受容については、アメリカ文学研究において、とりわけエマソンとの関係に焦点化した論考が数多く存在する<sup>6)</sup>。

本稿の当面の目的は、漱石とホイットマン、ホイットマンとエマソンの関係性をめぐるこうした先行研究を踏まえ、近代市民社会の礎となる民主主義の主体としての「大衆」「個人」の在り方を、三者の言説、詩作のなかに読み取り、エマソン、ホイットマン、漱石の思想のなかに貫かれる思想的水脈を描き出すことにある。その際に、考察の視点を、超越主義に端を発する「自己信頼」の思想が、漱石「個人主義」形成にいかなる影響を結果としてもつことになるかについて焦点化する。

## II. 漱石の個人主義思想の特質

### 1 「私の個人主義」より

「私の個人主義」は、漱石が大正3年に学習院で行った講演を筆記したもので、漱石48歳の時の作品である。漱石は個人主義を実践するには次の

3点を挙げた。

すなわち「自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない」、「自己の所有している権利を行使しようと思うならば、それに付随している義務というもの的心得なければならない」、「自己が全力を示そうと願うならば、それに伴う責任を重んじなければならない」である。組織に所属する者にはなかなか判らない見識かもしれないが、漱石が提示する「個人主義」は決して自分勝手に何をしてもよいというものではなく、常に自己責任と義務を伴うものであり、また同時に他人の個性をも尊重しなければならないものでもある。ここでは、自分が生きる道は他人に従い、他人の価値観によって引きずられて生きるのではなく、自分で見いだすと説かれている。そのうえで、その出発点に立てたら、自分の仕事に邁進することが大事であり、そうしなければ一生の不幸であると述べている。以下本節では、漱石の個人史と日本の当時の歴史状況を含めて述べてゆく。そして「私の個人主義」という作品のもつ意義を明らかにするとともに、漱石における「個人」の位置づけを明らかにする。

### 1) 漱石の個人史

明治時代の歴史状況においては、夏目漱石の生まれた年は、徳川幕府による封建体制の崩壊の時期に当たり、日本はその翌年から年号を明治と改め、西欧の列強と対抗すべく近代国家体制の火急な構築を企図する。つまり、明治の年号よりも一年年長である漱石による半世紀に及ぶ生涯は、日本におけるこうした歴史的な変革期とほぼ時期を同じくしている。明治から大正時代には、日本の開国による西洋文化の到来、日清戦争と日露戦争という二つの戦争、明治時代の終焉（明治天皇の崩御）などがあった。

ここでの明治に仕える知識人たち、かつては武士階級であり、日本の藩、家といった集団に仕えることに重きを置きながら日本を動かし、日本の未来を考えてきた人たちは、西洋に追いつこうと必死に進歩を遂げる日本の成長が、西洋人の模倣でしかないむなしさを理解しており、また封建制度が薄れつつある時代の中で、自我を見つけてい

くことに苦悩している。

漱石は熊本の第五高等学校（1896年6月～1900年7月）での英語の教師生活を経て、1900年9月に文部省第一回給費留学生として、官命のもとに満二年間英国へ出立している。

幼少期に関しては、漱石は生まれてすぐ里子に出されて、実の親から愛情をもらえず愛情に飢えた幼少期を送り、被害妄想やうつ病になりやすいトラウマでもあった<sup>7)</sup>。

1892年10月に漱石は「文壇における平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』の詩について文章を著す。漱石は、ホイットマンの「独立精神」を称揚し、その「独立精神」から自身の「個人主義」の形成に大きな影響を受ける。

漱石の「個人主義」の形成を考える際に、彼のイギリス留学の影響は看過できない。漱石のイギリス留学は文部省の命令であり、自ら望んだ訳ではなかった。漱石は文学というのはどういうものかという不安を抱いて大学を卒業し、松山から熊本へ赴任し、さらにイギリスへ留学して悩みに悩んでやっと文学について、なかでも彼の終生のテーマともなる「自己本位」について答えが見つかったようである。イギリスに留学して日本とは異なる個人の在り方に気づき、果たしてイギリス文学の本質を理解できるのだろうかという戸惑いも覚えた。漢文をこよなく愛し、俳句をたしなみながら日本の精神文化に入り浸りきって生活した漱石にとって、イギリスは決してその文化を受容しやすい国ではなかった。こうした意味合いで、漱石にはイギリスの文学を研究するに際して、葛藤もあった。漱石は、「文学とは何か」という疑問から出発したが、書物を読んでもどこにも答えがないばかりか、留学した当時には、書物を読む意味さえ分からなくなっていた。そして彼がたどり着いた結論は、書物を読むだけでは、人真似に過ぎないこと、それゆえ文学の概念は自分で作り上げるものだということであった。

漱石はイギリスを好んでいなかったが、イギリスで西洋的自由主義と個人主義を学び、それに影響を受けて帰国する。漱石は言う。「西洋人がこれは良い詩だと言っても、自分が心からそう思わなければ、受け売りすべきではない。我々日本人は、イギリスの奴隷ではない。一個の独立した日

本人である限り、自分のしっかりした見識を持つべきだ」と。彼は西洋人の近代的個人主義に感化されながらも、無批判な西洋化の風潮を拒絶する一方、帰国後は日本の封建主義の残滓という「世間」から脱皮を図ろうと試みる。

その後、心の内部を掘り下げながら、近代的自我をぎりぎりまで追求した漱石が最後にたどり着いた境地は、「許す」ことを理想とする立場であった。それは晩年に彼の揮毫に見られる「則天去私」の思想に通ずる。個人の自我を超えた大きな存在（天）に、自分を委ねる生き方である。天に委ねることで人に寛容であり、何ものをも包摂できるという、ある種の悟りであった。

## 2) 漱石にける「個人」の位置づけと「私の個人主義」のもつ意義

イギリス留学している間に、漱石は次のように記している。「この時の私は初めて文学はどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救う途はないのだと悟ったのです。今まで全く他人本位で、根のない萍のように、そこいらをでたらめに漂っていたから、駄目であったという事によく気が付いたのです。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んで貰って、後からその品評を聞いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似を指すのです」<sup>8)</sup>。

「私の個人主義」の中では、漱石はイギリス留学中に自分の生きるべき道を決めたと述懐しているが、この作品のライトモチーフは、「自己本位」とは何かを立証することであった。この「自己本位」という精神的態度は漱石の自己信頼の基礎ともなっていた。それは漱石が次のように述べていたことからもうかがえる。「私はこの自己本位という言葉をも自分の手に握ってから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと気概が出ました。今まで茫然と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図をしてくれたものは実にこの自己本位の四字なのであります。」<sup>9)</sup>ここに言われる「自己本位」は個人主義と同義であろう。漱石に言わせると、個人主義と利己主義とは全く違うものである。個人は自由にふるまってもよいが、必ずそれには義務が伴う

ものであると漱石は語り、さらに、自由に行動するには徳が必要であることにも言及する。徳を人格者と置き換えても同じである。

漱石の自己本位とは、日本人固有の視座・立場から、西欧の文学文明を洞察し批評しようとする、文学観及び創作の姿勢・態度の立脚点の確立であり、それは即ち、対西欧的な自我の確立、さらに言えば、彼による対西欧的な位相を帯びた個人主義定立であると言っても過言ではない。「自我の実現にその価値を置く個人主義は、そうした意志が過剰に発見される場合、利己主義・自由主義・物質万能主義さらには権力をも引き起こす可能性を多分に秘めている」<sup>10)</sup>と漱石は、際限なき自我の実現を戒めてもいた。

明治時代は日本中が国家主義に沸きかえっている時期であった。国家主義とは、国のために自己を抹殺することであるという意味合いにおいては、漱石は公然とこれに反発していた。それ以上に漱石は国家的道徳よりも個人的道徳のほうがはるかに優れているとも言っている。その言葉の裏には国が優れたものになるためには個人が優れたものにならなければならないという意味が隠されているようである。

結局、漱石が「自己本位」ということを追求するためには、「文学研究」という枠の中では不可能であった。漱石にとって、それは小説という舞台でもって初めて可能となった。

以上のように、イギリスで「個人主義」を発見した漱石は、長い人生行路の末に、個人主義を超える生き方を発見した。漱石の評論は半世紀以上も昔のものであるが、その思想は今日なお示唆するところが多く、日本の将来を探索する指針を含んでいる。漱石文学は繰り返し出版されているが、その要というべき講演集は日本国民の思考の基盤ともなる。

## 2. 漱石によるホイットマン論（「文壇における平等主義者の代表者『ウォルト・ホイットマン』の詩について」）

### 1) 漱石「個人主義」形成へのホイットマンの影響

ホイットマンは、1892年3月に亡くなるのであるが、同年10月に漱石は「文壇における平等主義

の代表者『ウォルト・ホイットマン』の詩について論評を書く。漱石は、ドゥーデン(Edward Dowden)の「ホイットマン論」とライス(E. Rhys)編集『草の葉』によってホイットマン像を描いた。このような執筆環境条件をみると、漱石による論考は、ある限定された枠内で書かれた「ホイットマン論」である<sup>11)</sup>。

夏目漱石が学生時代にホイットマンについて寄せた論考をみると、ホイットマンの「独立精神」と漱石の「自己本位」がある共通項をもつことがうかがえる。この論考のなかで、漱石はホイットマンに関して次のように述べている。「元来共和国の人民に何が尤も必要な資格なりやと問は独立の精神に外ならずと答ふるが適当なるべし独立の精神なきとは平等の自由のと噪ぎ立つるも畢竟机上の空論に流れて之を政治上に運用せんこと覚束なく之を社会上に融通せんこと益難からん人は如何に言ふとも勝手次第我には吾が信ずる所あれば他人の御世話は一切断はるなり天上天下我を束縛する者は只一の良心あるのみと澄まし切つて陰悪なる世波の中を潜り抜け跳ね廻る是れ共和国の気風なるべし共和国に生まれる「ホイットマン」が己れの言ひ度き事を己れの書き度き体裁に叙述したるものは亜米利加人に恥ぢざる孤立の氣象を示したるものにして天晴れ一個の快男児とも偉丈夫とも称してよかるべし」<sup>12)</sup>。

この引用から漱石が「独立した氣象を示した」ホイットマンの言動を肯定的にとらえており、とりわけ彼の独立精神に対して敬意を表していたことが読み取れる。ここで「独立精神」と呼ばれて称揚されているのが、後に漱石によって「自己本位」ということばで言表されることになる概念の萌芽が見出せる。

## 2) 「平等主義」と「独立精神」「自己本位」の関係

漱石は、ホイットマンの詩集に関する論考で、19世紀のホイットマンが身を置くアメリカ民主主義に関しては、「時間的に平等に、空間的に平等なり。人間をみることは平等に山河禽獣を遇すること平等なり。」と分析していた。

漱石は、ホイットマンの「平等主義」と「独立精神」（「自己本位」）の関係を次のように述べ

ている。「平等について一じぶんと同じ機会と権利を他人に与えるんじゃ、平等こそじぶんに害があるみたい—他人が同じ権利をもっているんじゃ、まるでじぶんじしんの権利にとって、平等が必要不可欠でないみたい」<sup>13)</sup>。「平等」にかなり敏感だった漱石がごく若いころから「独立精神」すなわち「自己本位」を思想として尊重していたことに疑いはない。「自己本位」を平等に生きる人びとが、そのために当然余儀なくされる社会、「自己」が相対的のものでしかありえないという現実と他者を尊重すべきであるという理想とを、併せて見届ける生活者でもあった<sup>14)</sup>。

また漱石は「文壇の趨勢」の中で平等主義に関して次のように述べている。「いわゆる文明社会に住む人の特色は何だと纏めて云って御覧なさい。私にはこう見言える。いわゆる文明社会に住む人は誰を捕まえてもたいてい同じである。教育の程度、知識の範囲、その他いろいろの資格において、ほぼ似通っている。だから誰かれの差別はない。皆同じである。が同時に一方から見ると文明社会に住む人ほど個人主義なものはない。どこまでも我は我で通している。人の威圧やら束縛をけっして肯わない。信仰の点においても、趣味の点においても、あらゆる意見においても、かつて雷同附和の必要を認めない。また阿諛迎合の必要を認めない。してみるといわゆる文明社会に生息している人間ほど平等的なものはなく、また個人的なるものはない。すでに平等的である以上は圏を画して圏内圏外の別を説く必要はない。またすでに個人である以上はどこまでも自己の特色として保存する必要がある」<sup>15)</sup>。

このように漱石は平等主義と個人主義の関係について、自己をしっかり持たず、人のいう事をそのまま附和することは本当の平等主義ではないことをはっきり主張している。漱石は「独立精神」がなければ「平等」も「自由」も「政治上の運用」することができない『机上の空論』に終わる儂いものであると考えていた。その意味で「自己本位」は社会的貢献の基礎とも見なされる。

漱石と同時代、ロック(John Locke, 1632-1704)の思想が日本にも輸入され、福沢諭吉らによって「天賦人權論」として説かれている。ここに言われる「天」も神の意味であり、人権は神から賦与

されるがゆえに不可侵であることが述べられる。つまり、この場合神が個人の権利主張のさいの準拠枠になっているのである。この神を人格神と捉えるかどうかは別にして、自己を超えたところに超越的な存在を設定する態度は漱石の個人主義のなかにもみられる。

前述したように、国家主義に対して反発し、国家的道徳よりも個人的道徳のほうに優位性を認める漱石であったが、こうした信念の背景には、国が優れたものになるためには個人が優れたものにならなければならないということが含意されていた。そして、こうした個人単位の道徳的陶冶による社会変革というストラテジーは、ホイットマンの、ひいては19世紀前半の超越主義の主張にリンクする考え方であった。漱石が、ホイットマンにみた独立精神をもった個人によって構成される平等な民主主義社会という観念はその源流を超越主義者たちの思想のなかにもつという着想は、彼によるホイットマン思想への接触という点からあながち穿った見方ではないだろう。このような着想を検証するため、次に19世紀のアメリカ超越主義思想とホイットマンによるその受容について論考し、超越主義の核となる「自己信頼」概念と漱石「則天去私」概念との類似性を探ることにしたい。

### Ⅲ. アメリカ超越主義における自恃論—エマソンからホイットマンへ

#### 1. 「超越」的思潮とエマソン

ホイットマンが文壇に登場する19世紀40年代に先行する時代に、アメリカ精神史上影響力をもっていた思潮に超越主義 (Transcendentalism) がある。文学史のなかでは、時折ホイットマンもこの思潮のメンバーに含まれることもあるが、超越主義思想の担い手たちが活動した時期はホイットマンよりもワンディケード先である。

超越主義は19世紀20年代にニューイングランドのコンコードを中心に台頭してきた思潮であり、その影響は文学をはじめ、宗教、哲学、芸術等多岐にわたる。その中心となる人物はアメリカの「知的独立宣言」<sup>16)</sup> で知られるエマソンである。超越主義を一言で定義することには困難が伴うが、エマソンの言に従うと「ある種の唯心論」

<sup>17)</sup> であり、物質的なものに対して精神的なもの優位性を説く思想であった。この思潮の担い手のほとんどはユニテリアン派の牧師出身で占められていることから察せられるように、元来この思潮は宗教の領域で産声を上げた。宗教領域において、ユニテリアンとそれに続く超越主義が克服の対象としたのは、植民地時代以来アメリカの人々の精神に強く影響してきたピューリタニズムであった。

17世紀にアメリカに植民してきた人々のほとんどはプロテスタントの一派であるピューリタン (会衆派カルヴィニスト) たちであった。植民地ピューリタンたちはみな、教会の退廃と世俗化に抗して新大陸にやってきた人々である。彼らが奉じていた教義は、予定説と原罪説であり、それらは人間の墮落と神の前における人間の卑小性を説いていた。

こうしたピューリタニズムに対して、18世紀以降登場してくる理神論のひとつであるユニテリアニズムは、人間の自由意思を重視する理性尊重の立場から、ヒューマニズムの神学を提唱する<sup>18)</sup>。その代表は1819年にボルティモアで「ユニテリアン・キリスト教」(Unitarian Christianity) と題する説教を行ったフェデラル・ストリート教会のチャニング (William Ellery Channing, 1780-1842) である。彼はエマソンら超越主義者をして、「われらが主教」(our Bishop) と呼ばしめた人物であり、彼の自由神学思想はユニテリアンと超越主義との懸け橋的な役割を担った。

エマソン自身、ハーヴァードを卒業後、1832年までボストン第二教会の牧師職を務めており、元々宗派的にはユニテリアンとして活動していた。エマソンら超越主義者たちは、チャニングが説いた人間の善性をさらに推し進め、人間本性に神性を認めた。その論拠は、エマソンが『自然論』(Nature) のなかで論じたように、個人の魂 (精神) による神や自然と直観的なつながりに求められる。すなわち、人間は神や自然と精神的なつながりを有するがゆえに、「神と同じくらい」に神聖な存在であるとされた。その際、「自然は精神の象徴」<sup>19)</sup> であり、こうした精神は、大いなる「理性」(エマソンは「大霊」over-soul と呼ぶ) の表れでもあるために、自然もまた神性を

宿すのである。こうした人間観、自然観に関連して、超越主義は、ユニテリアンがそうであったような宗教的な枠組みを超えて、文学、教育をはじめとする多岐にわたる社会活動において、人間主義的な理想主義を説いてゆくことにつながった。

超越主義者エマソンとユニテリアニズムとの決別が決定的となったのが、彼による説教「主の晩餐」(The Lord's Supper)であった。この説教の中で彼は次のように語っている。「私は、教会の皆さんに対し、パンやぶどう酒を使用するような儀式を取りやめ、このような儀式を行うこと自体に、何か権威をもっているかのように主張することをやめるように提案し、同じ目的をもつての集まり、誰の反対もなく開かれるようなやり方を提案しているのです。皆さんは私の意見を忍耐強く率直に検討したうえで、現行の形式を守るほうがよいとの結論を満場一致で推薦されました。したがって、私はこの儀式を続け、教会を運営していくことがよいかどうか考えてみなくてはならなくなりました。はっきり言って、私は牧師として教会の儀式をこれまでどおり執り行っていくべきではない、というのが私の見解です。私はすでにずいぶん長くお話をしてまいりましたから、私の決意の理由は、端的に言って、次のようなことだとしか言うことができません。つまり、キリスト教の牧師としての仕事をしていく場合、心を込めてすることのできないことは、何ひとつやりたくないというのが私の願いなのです。これだけ言ってしまったのですから、すべてを言ったのと変わりありません」<sup>20)</sup>。こうしたエマソンの提案はボストン第二教会の会衆には到底受け入れがたいものであり、その結果エマソンは牧師職を辞任することになる。

## 2. 自恃の教えーアメリカにおける自我の芽生え

「自恃」(self-reliance)あるいは「自己信頼」(self-trust)はエマソン超越主義思想の中核である。エマソンはエッセイ“self-reliance”の冒頭において次のように述べている。「自分自身の思想を信じること、自分にとって自分の心の奥で真実だと思えることは、万人にとっても真実だと信じること、——それが普遍的な精神というもののなのだ。内心にひそむ確信をひとたび語れば、

きっと普遍的な意味をそなえたものになる」<sup>21)</sup>。このエマソンの言表には、彼による自恃の教義がもつとも鮮明に表れているが、こうした「自己信頼」の思想は、先述したような、神との直観的なつながりを持つことを通しての人間の神聖化にその論拠が求められる。

このような信念はまたエマソンをして「もし、私が悪魔の子であるならば、私は悪魔に従って生きるまでです。私の本性の法則以外にどんな法則も、私にとって神聖ではあり得ません」<sup>22)</sup>と語らしめる。

この彼の発言は、いきおい自我の際限のない肥大化に帰結するとの危惧もある。周知のように、近代の理性主義は自己保存の原理に基づき、自我と自我のぶつかり合いをいかに調整するかということが、近代国家誕生の一契機にもなった。この歴史的な文脈からみると、エマソンの自恃の教え、自己信頼の思想は、楽観的に過ぎ、ホブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)が回避しようと試みた『リバイアサン』(Leviathan)のなかで示される「万人の万人に対する闘争」(the war of all against all)をみすみす奨励するような言説、あるいはルソー(J.-J. Rousseau, 1712-1778)が『社会契約論』(Le Contrat Social)のなかで示した「一般意思」概念をなし崩しにする言説に転化する可能性をも有している。

他方でエマソンの説く自恃の教えは、近代における自己保存の原理という文脈上での「自分中心主義」とも区別される。それもまた彼の「自己信頼」思想が、神の無限なる精神に包摂されるという自然観、人間観を前提にしていることによる。こうした自然観、人間観は、人間の本性の神聖化の論拠となる一方で、自我の肥大化への制御としても働いている。エマソンは言う。「人間は個人的生活の内部あるいは背後に普遍的な魂の存在することを意識しているが、この魂のなかにおいては、あたかも大空のように“正義”“真理”“愛”“自由”の本性が現れ輝いているのである。この普遍的な魂を、人は『理性』と呼ぶ。その理性は、私のものでも、あなたのもので、彼のものでもなくて、われわれの方が理性に属しているのである。われわれ人間の方こそ、理性の所有物であり、従僕である」<sup>23)</sup>。

このようにエマソンの思想にあつては、個人の精神を「普遍的な魂」（理性）との関係において限定し、後者を前者の自己準拠システムの枠組みとみなすところに特徴がある。この点は、先に指摘した、漱石「個人主義」のエッセンスである「自己本位」を基調とした「平等主義」にも通底する特徴である。

エマソンの自己信頼の思想は、19世紀前半のピューリタニズムが色濃く残る社会において、個としての人間の本性に対する信頼を回復するための対抗思想として有効であったが、産業化、都市化のさらなる進展と奴隷制をはじめとする社会問題が顕在化してくる19世紀後半には、その個人主義的思想は修正を余儀なくされる。その渦中であつたのが、ホイットマンであつたといえる。

### 3. ホイットマン—アメリカと自我の結合

ホイットマンの生涯は、ほぼ19世紀の大半にまたがり、アメリカの激変期に相当する。こうした激変は、たとえば「明白なる運命」（manifest destiny）というスローガンの下での西漸運動と拡張主義、南北戦争と戦後の混迷、産業革命と資本主義の発展、都市化等が含まれている。また、文学史的にみたときには、ロマン主義からリアリズムに移行する時代であつた。こうした激変のすべてをホイットマンは直接体験した人物である。

ホイットマンは、印刷見習工から身を起し、1840年代には社会派ジャーナリストとして活躍する<sup>24)</sup>。その傍らで小説『大酒飲みフランクリン・エヴァンズ』（*Franklin Evans: The Inebriate A Tale of the Time*, 1842）を著すなど文学的な執筆も行っている。評論『民主主義の展望』（*Democratic Vistas*, 1871）を著しているが、文学史的にみると彼はアメリカ近代詩人の創始者として位置づけられている。

ホイットマン文学は、先述したエマソンの自恃の教えをさらに大衆化した思想に貫かれている<sup>25)</sup>。彼が本格的に詩作活動を展開していくのが、19世紀50年代である。その頃には重工業部門を中心に産業革命が進行し、その過程を終えつつあつた。北部においては工業化都市化にともなう社会問題、移民の流入、南部においては奴隷制と民主政治との制度的矛盾を抱えていた時代であつた。まさに南

北戦争前夜である。超越主義のもつロマン主義的な樂觀性は、個人の本性を旧いピューリタニズムの牢獄から解放し、文化的にもアメリカの独自性を意識させることに成功したが、個人と社会との間に存在する制度には無頓着であつた。こうした無頓着さから、1850年代には、しだいに運動としての超越主義は下火になっていく。ホイットマンは、自己信頼を説いた超越主義が勢力を失いつつあるなか、ある意味で彼らの自己信頼の思想を内容的にも形式的にも凌駕する様態で登場した。

1855年に「私自身の歌」（*Song of myself*）を発表したときに、「私は私自身を讃美する」と謳ったホイットマンに対して、エマソンは「私は偉大な道程の門出に立つ貴君に挨拶状を送る……このような出発のためには、どこかに長い先立つ時期があつたに違いない」<sup>26)</sup>と書き送っている。エマソンは、ホイットマンによる性的表現は受け入れることができなかつたが、ホイットマンの誇大ととれる自己信頼の表明に対しては好意的であつた。

アメリカにおける知的独立の切掛けをつくったエマソンもアメリカに対する理想は表現していたものの、ホイットマンはアメリカ合衆国という国家を一個の有機体として捉え表現する欲望をもち、それがひいては自らをアメリカと一体化させる表現へとつながっているといえる。ホイットマンは『草の葉』（*Leaves of Grass*）初版の序文において「アメリカ自体が最大の詩」であり、詩人は「超越的で新しい」表現形式でアメリカを「具現すべきである」と説いた。ホイットマンによって「アメリカ」はいかなる集合体であつたのかについては、次の行に示されている。「アメリカは過去を拒まず、たとい古い形式の下で、古い政治体制のさなかで生み出されたものであつても、たとい身分制度の思想であれ今は人心をはなれた宗教であれ、ともかくも過去のいっさいの所産を拒まず——平然とその教訓を受け入れ——すでに役目を果たした生命が今は新しい形式を得て生まれ変わっているというのに、意見や風俗や文学が未だに過去の形骸に装われ、露命をつないでいるからとて、けっして苛立つことなく——その屍が寝室や食堂からゆっくりと運び出されていくのを認め——それが戸口のところに至ってしばしためら



う姿を認め——それがその時代には一番ふさわしかったのだということ——そして今や登場を待つ頑健で見事な肉体を具えた後継者の手中に活動のバトンが譲り渡され——この新たな人物も、やはりその時代には最適だろうと認めるのである<sup>27)</sup>。

他国、とりわけヨーロッパと対比させたアメリカについての描写では、やはり民主主義を意識した行となっている。「他の国なら代表者をたてて国威を示しもしようが——しかし合衆国の真価を、はっきりと、あるいはくまなく表しているのは、行政部でも立法部でもなく、さては大使、作家、大学、教会、社交界でもなく、新聞や発明家たちですらなく——東西南北のあらゆる州に、その力強く豊かな国土のいたるところに生きている民衆こそ、つねに最大の代表者なのだ<sup>28)</sup>。そしてこうした民衆の代弁ツールとして詩をあげ、詩人を民衆の代表としてホイットマンは位置づける。「旧世界には神話、虚構、封建制、征服、階級制度、支配者層、戦争、立派な例外的人物や事柄に関する詩があり、それらは偉大であった。しかし、新世界は現実的、科学的、民主的な一般的人間と基本的な平等についての詩を必要としている。それらはさらに偉大なものになるであろう。すべてのものの中心に、そしてすべてのものの対象の中に、人間が存在する<sup>29)</sup>。ここに言われる「基本的な平等についての詩」に関しては、ホイットマンの詩作の方法が抛って立つ新しい表現形式は、「新しい文学」(a New Literature)「新しい詩」(a new Poetry)であると同時に「新しい形而上学」(a new Metaphysics)とも換言され<sup>30)</sup>、形式のみならず思考の枠組みそのものの新しさが求められていた。ホイットマンが超克しようと試みた思考の枠組みとは、近代西洋が抱えた主体と客体の二項対立図式であり、これらの峻厳なまでの対立の解消という課題は、穿った見方をすれば、ポストモダンの先取りでもあった。こうした主客を合一させる企図は、エマソンの大霊(大文字の「理性」)によって包括される自然観にもすでにみられるが、ホイットマンの次のような表現にもあらわれてくる。「ぼくの精霊は共感にひたり決意を貫きつつ地球をすっかりまわり終え、ぼくと対等に愛を交わすことができる者たちを探し求めてあらゆる国々に彼らがぼくを待ち受けていてくれる

ことを知った。きっと神聖な何かの霊がぼくと彼らのあいだに通りあいぼくらを対等にしてくれたに相違ない<sup>31)</sup>。

「共感」を媒介に、このような自分と他者、自我と非我との間の境界の曖昧化は、それらとの対等な関係を築く要であるとともに、私的な自己を超越する契機でもあった。それらは自然に存在する万物に対しても適用されることにより、次のホイットマンによる詩的表現は、さながらエマソンの「自然論」を想起させるものとなっている。

「地上のあらゆる芸術と議論を越える平和と歓喜と知識が迅速に立ち現われてわたしの周りに広がった、そして私は知る神の手は私の手の年長の兄弟であるということ、そしてわたしは知る神の霊は長兄であるということ、そしておよそ生まれてきた男たちはすべてわたしの兄弟であり……女たちはわたしの姉妹であり恋人たちであるということ、そして万物を支える内龍骨は愛であるということ、そして野原のこわばったあるいは萎れた葉っぱは無限であり、そしてその葉っぱの下の小さな窪みに這う褐色の蟻も無限であり……<sup>32)</sup>。

#### IV. 結びにかえて—漱石「個人主義」のなかに流れる超越主義思想

以上、小論においては漱石の「個人主義」思想を、その形成過程をたどりつつ、彼の「則天去私」に裏打ちされた「自己本位」概念を描出した。その上で、彼が比較的肯定的に受容したホイットマンならびにその前史にあたる超越主義思想家エマソンの個人主義思想との水脈を浮き彫りにすることを試みた。

漱石がホイットマンの作中に見出したのは、個人の独立精神を基調とする平等主義であった。こうした平等主義は、時間的空間的な「平等」観であった。そして、平等主義は個人主義を基調とするアメリカ民主主義の礎でもある。

ホイットマンの「平等」観は、一方において、19世紀のアメリカにおいて民主主義の一翼を担っていた大衆文化を称揚する態度に満たされていたといえる。その際、彼による「大衆」賛美は、「大衆」のなかに個人を埋没させるのではなく、個人の賛美を前提とする大衆社会の肯定的表明であった。その意味では、個人主義の延長線上にデ

ザインされた集団主義ともいえる社会観であり、こうした個人主義の賛美は、思想史的文脈をたどると超越主義における自恃の教え（「自己信頼」の思想）につながることを本稿のなかで確認された。

上のような作業を通して、漱石の「他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」「党派心がなくて理非がある」<sup>33)</sup> ような個人主義の奨励のなかに、ホイットマンを経由した、エマソンの自己の在り方に関する超越的思想からの影響の一端が見て取れることを本稿では明らかにした。

このようなエマソン、ホイットマン、漱石の個人主義思想で言及される「自己」は、西欧近代的な自我とは異なる、ある種の東洋思想的な要素が混在していることもここで付言しておく。そしてこのような要素を含むことによって、三者にとって、大衆のなかにあつて個が集団に埋没しない個人主義を基調とする民主主義を唱導することが可能であったといえる。漱石個人主義の西欧近代的要素と東洋的要素に関する詳細な研究、ならびにエマソン、ホイットマン思想における東洋的要素に関する詳細な研究は今後の課題として他稿に譲ることとしたい。

## 【注】

- 1) この植木の草稿は、戦後GHQ主導による日本国憲法草案のベースとなったと言われる。この見解については次の研究を参照されたい。堀真清「植木枝盛の憲法草案(1881年)―合衆国憲法と日本国憲法とを架橋するもの」『西南学院大学法学論集』、23(2)、1991年、p.171-211。
- 2) この時の漱石の留学は英語研究のためとされているが、「大学ノ講義ハ」授業料を「拂ヒ聴ク価値ナシ」として、漱石は途中でロンドン大学の英文学の講義を受けるのをやめている。(夏目漱石(村岡勇編)『漱石資料―文学論ノート』、岩波書店、1976年)
- 3) Dewey, J., "Emerson-The Philosopher of Democracy," *International Journal of Ethics*, Vol.8., NO.4., July, 1903, p.407.
- 4) 亀山佳明『夏目漱石と個人主義―“自律”の個人主義から“他律”の個人主義へ』、新曜社、2008年。
- 5) 鈴木保昭「夏目漱石とホイットマン」『専修商学論集』14, 1973年, p. 99-130. 吉武好孝「夏目漱石のホイットマン受容―E. ダウデンの『ホイットマンロン』との関連」(『英学史研究』10号, 1977年, p. 1-16)
- 6) 両者の影響関係については、エマソンがホイットマンに宛てて、彼の『草の葉』に対し賛辞を送ったという事実から、アメリカ文学研究ではなれば常識中の常識になっている。
- 7) ここにいう「うつ病」とは正確的に言うと神経衰弱となる。現代的に一般的なうつ病は当時では神経衰弱という言い方であった。漱石は何回もかかったこと中で、イギリスに留学中に一番ひどい神経衰弱に陥っていたが、自分はこれまで他人本位ではないか、それこそが空虚しさや不安の根本原因だった。そして彼は「他人本位」から「自己本位」へ脱出することで、神経衰弱も徐々に良くなり、作家夏目漱石が誕生させる出発点でもあった。
- 8) 向学新聞 2002年11月号。
- 9) 夏目漱石『私の個人主義』講談社, p. 136.
- 10) 夫伯(2000)「夏目漱石」『吾輩は猫である』主題論『日本文学報 第9集』韓国 日本文化学会。
- 11) 漱石自身、こうした限界について、William M. Rossetti 編集『ウォルト・ホイットマン詩集』(Poems by Walt Whitman)や、Richard M. Buckeの『ウォルト・ホイットマン』(Walt Whitman)、ホイットマン自身による“Specimen Days and Collect”を読んでいたなら、より一層の広がりをもつホイットマン論が書けたであろうことは、論文のなかで認めている。
- 12) この漱石の言表は「哲学雑誌」からのものである。「哲学雑誌」は井上円了らによって明治十七年一月に創立した「哲学会」の機関誌。当初は『哲学会雑誌』として明治二十年二月に哲学書院より創刊されるが、明治二十五年六月、第七卷第六十四号から『哲学雑誌』と改題して哲学雑誌社より発行されることとなる。漱石は明治二四年七月から明治二六年一月まで「哲学雑誌」の編集委員を務めており、当時執筆された漱石の多くの文章は同誌に掲載されている。(武田充啓「『自己本位』と『則天去私』―漱石における自己への態度―(二)」(奈良工業高等専門学校紀要.Vol. 45 [2009年度]), p. 7.)
- 13) ホイットマン(木島始編訳)『ホイットマン詩

- 集』、岩波書店、1997年、p.113.
- 14) 武田 充啓「「自己本位」と「則天去私」—漱石における自己への態度—(二)」(奈良工業高等専門学校紀要.Vol.45 [2009年度].93-104) 参照.
- 15) 夏目漱石「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房1988年.
- 16) アメリカの知的独立宣言と位置づけられるのが、1837年のエマソンによる講演「アメリカの学者」(American Scholar)である。エマソンはこの講演の冒頭で次のように述べた。「このアメリカ大陸での怠慢な識者が、その重い瞼の下から目を見開き、機械的技能の運用よりも、はるかにすぐれたものをもって、後回しにされてきた世界の期待を、遅ればせながら満たす時期がすでに到来しているのである。われわれの依存の時代、他国の学芸に対する長年の徒弟時代は終わろうとしている」。(Emerson,R.W., "American Scholar,"*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Vol.1*, Boston, Houghton Mifflin & Co., 1903, p. 81.) この講演は、学者のあるべき姿を論じる形で、学者の自立性を説くと同時に、ヨーロッパの模倣を脱することによって、自らの文化を創造することへの要請であった。
- 17) エマソン(酒本雅之訳)「超越論者」『エマソン論文集 下』岩波書店、1973年、p. 71。
- 18) この時期には、メイヒュー(Jonathan Meyhew, 1720-1766)のようにピューリタニズムに属する会衆派内部からも理神論への傾斜が起こってくる。また同時期にヘンリー・ウェア(Henry Ware, 1764-1845)が、ハーヴァード大学に神学部を創設し、同大神学部は19世紀ボストン・エリートとしてのユニテリアン牧師養成の牙城となっていく。
- 19) エマソン(酒本雅之訳)「自然」『エマソン論文集 上』岩波書店、1973年、p. 57.
- 20) エマソン「主の晩餐」『エマソン論文集 上』, p. 29-30.
- 21) エマソン「自己信頼」『エマソン論文集 上』, p. 193.
- 22) エマソン「自己信頼」『エマソン論文集 上』, p. 198-199.
- 23) エマソン「自然」『エマソン論文集 上』, p. 58.
- 24) ジャーナリスト時代には、主として40年代前半期はニューヨークで日刊紙『オーロラ』(New York Aurora)の編集、後半期は日刊紙『イーグル』(Brooklyn Eagle, and Kings Country Democrat)の編集に携わった。この二紙を含めて8種類の新聞にホイットマンはかかわっている。Allenによって、この時期のホイットマンの民主党への傾倒が指摘されている。(Allen, Solitary Singer: A Critical Biography of Walt Whitman, New York, New York UP., 1967.)
- 25) ハーヴァード大学のチャールズ・エリオット・ノートン教授はホイットマンの『草の葉』を超越主義と結び付けて次のように評している。「その詩は手短に述べれば、ニューイングランドの超越主義者とニューヨークの無頼の徒の合成ということになるだろう。消防士か乗合い馬車の馭者が、15年か18年前にボストンで最高潮に達したあの流派(超越主義者たち)の思弁を吸収する知力があり、それを彼自身の形式で再現する才能を持ち、従来のあらゆる適正な言葉の使い方を侮辱するに十分な自惚れと世人の趣味に対する軽蔑を抱いているなら、この野卑でしかも高潔な、この浅薄でしかも深遠な、この言語道断でしかも人を魅了して止まない本を書くことができたのであろう」。(Hindus, M. ed., WW. The Critical Heritage, London, Routledge & Kegan, 1971, p. 25.)
- 26) (『読者版』p. 730) エマソンはホイットマンの『草の葉』に賛辞をおくりながらも、第三版が出版される前に性にかかわる詩を削除するように忠告している。(Speciman Days, p. 281-82.)
- 27) ホイットマン(杉木喬・鍋島能弘・酒本雅之訳)『草の葉 上』岩波書店、1969年、p. 11.
- 28) ホイットマン『草の葉 上』, p. 12.
- 29) Whitman, W., "A Backward Glance o'er Travel'd Roads," *Leaves of Grass*, p. 568.
- 30) Whitman, Walt, *Complete Poetry and Collected Prose*, New York, Library of America, 1982, p. 984.
- 31) ホイットマン『草の葉 上』, p. 341.
- 32) ホイットマン「わたし自身の歌」『草の葉 上』, p. 107.
- 33) 夏目漱石「私の個人主義」、三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫、1986年.

**[Original Article]**

## The Self-Reliance Element of the Soseki's "Individualism" Thought; The Influence from the American Transcendentalism.

Ji fen GAO<sup>1</sup>, Takashi Yamamoto<sup>1</sup>

*<sup>1</sup>Kyushu University of Nursing and Social Welfare, Department of Social Welfare*

**【Abstract】**

Soseki Natsume, Emerson, and Whitman whom this paper takes up are people living at a democratic signs term. This paper's purpose is to clarify the Idea of "self-reliance" which made the starting point the transcendental thought used as the important point of American democracy thought received by Soseki via Whitman, and to explore the meaning of individualism thought in Soseki.

The "self" mentioned with the individualism thought of Emerson, Whitman, and Soseki is different from modernistic self in Europe, that is a certain kind of oriental-thoughts. It was possible to have asserted the democracy which makes individualism the keynote by this thought.

In this paper, that the ideological seaway of Emerson, Whitman, and Soseki was thrown into relief, It will become an opportunity for applying light to the process of individualism acceptance over American literature and Japanese literature research, and will become a cornerstone for positioning the special feature of Soseki's individualism in the history of American literature, and mentioning.